

日本文學誌要

杉本圭三郎 先生 追悼特別号
笠原 淳 先生



煙突部屋の思い出ほか

勝又 浩

大学の研究室が今は教員一人一部屋だが、平成一〇年頃までは二人で一部屋だった。それで私も赴任当初は西田勝さんと相部屋であったが、三年後、西田さんが退職され、その後任として笠原さんが来られて、私と相部屋ということになった。西田さんの頃は何しろ荷物がいっぱいだったし、助手のSさんが常時いたので、私はほとんど研究室にはゆかなかった。ただし、連絡などあつてときに立ち寄るとSさんはすぐお茶を入れてくれて、いつも感じの良い女性だった。しかしそれでも部屋に長居はしにくかったのである。

そんなあとの笠原さんとの「同居」だったが、それで何よりも有り難かったのはタバコが自由に喫えるようになったことだった。西田さんもSさんも喫わなかったからだけではなく、その頃から世間も大学自体も喫煙にはうるさくなっていたのだ。会議中はむろんのこと、いろいろなところで規制が始まっていたが、むろん研究室での喫煙は当人たちが任せであったから、ともに「常識的な喫煙者」であった我々は研究室を自分たちの陣地のように心得ていた。80年館六階、一番東寄りの寒い部屋だっ

たが、ときに他の不自由な研究室からやってきて一服してゆける者などあつて、資料室の女性にエントツみたいですねと笑われたこともあつた。

その煙草も笠原さんは大学をお退きになって間もなくやめられたようだったが、かく言う私も退職後はすんなりと廃止できた。なかなか止められなかったのは勤めのゆえのストレス、それとも誘惑のせいだったのかはよく分からない。

この部屋で何年暮らしたのであつたか。実はお互いに出校日をずらすように設定していたから、実際に部屋で顔を合わせるのは会議のある日くらいだったのだが、それでも、新しく始まった文芸コースの卒業制作の基準作りなど、この部屋でやった共同作業も少しはあつた。

その頃、というのは日本文学科に文芸コースと言語コースを創設した平成六年ごろだが、必要に迫られてのことながら大学も文学部も様々な改革の機運に満ちていた。そうしたなかでとくに日本文学科はたぶん前例がないほどの親密なチームワークを組んでいた。その結果、教授会の後には必ず揃ってどこかへ流れていて、それを羨ましがる他学科の人たちがしばしば飛び入りで混ざるようなこともあつた。堀江さんに二度目の学部長を務めさせたり、学内理事に推し出したりしたのもそんな機運のなかで行われたことだった。そうした空気の一つとして日文科では春の箱根荘での泊りがけの懇親会を持つようになり、初参加だった笠原さんが鼻に貼り付ける軒防止の絆創膏を持参してきて皆で大笑いしたのも、今は懐かしい話だ。

我々は当然、年中顔を合わせているのだが、それでも何故か

揃えば話が尽きず止まらない。そうしたなかでも長い間にはおのずから幾つかのパターンができて、笠原・佐川が昔の映画の話を始めると、私などはまったく口が挿めなかった。あるいはおそらくお酒のキャリアーに比例するのであろうが、笠原・堀江の食べ物の話、やがてゲテモノの類のことになると我々は大方聞き役に回らざるを得なかった。

いま手元に雑誌がなくて曖昧な記憶を許していただくが、笠原さんが「日本文学誌要」に書いた『小説におけるK』というエッセイがあるはずだ。これは、たとえばフランツ・カフカで言えば「城」の主人公の名が「K」、「審判」では「ヨーゼフ・K」だが、夏目漱石ならば「ころ」の自殺した親友が「K」と呼ばれたままだったというように、東西を問わず小説には不思議に「K」と名付けられた人物が多いと、ある日の雑談で皆で面白い例を挙げたところから始まっていた。それは実は、タイトルは忘れたが、笠原さん自身の小説にも「K」が使われていて、そのことを私が指摘した、そこから始まって発展した話だった。

で、ちなみに私との関係で言うと、我々「文学界」の旧「同人雑誌評」担当四人の仲間で始めた雑誌「季刊文科」ではその創刊（平成八年）以来、たびたび作品を寄せてもらった。何しろ原稿料がけた違いに安い雑誌だから頼める作家はごくごく限られてしまうのだが、笠原さんには、同僚の誼ということではないぶん助けてもらった。同僚として近くで見えていたところでは、笠原さんは引越しをすると小説が何編もできて、そんなことを言っただけで何度か無理もお願ひしたのである。そして、その縁か

ら笠原さんの生前最後になった作品集「父への便り」（平成一七年、草場書房）が出せて、喜んでいただいたのも嬉しいことだった。

こんなふうにも思い出を辿っているとときりがないが、こうしたお付き合いができたのも笠原さんの構えたところのない、飾らない性格、またいつも穏やかで、何を言っても許されるような人柄のお陰であったに違いない。私なんかはしばしば瞬間湯沸かし器で、後から恥ずかしい思いをするばかりであったが、笠原さんが激昂するような場面には一度も立ち会わなかったのである。

そう、そんなふうにも書いてまた一つ思い出したことがある。何年のことだったか、ある講演会で一緒に話したときだ、始まる前に会場からビニール袋に入れた笠原さんの著書を五、六冊下げた男性が現れてサインを求めてきた。そんな恰好のよい経験をしたことのない私はそばで羨ましく眺めていたのだが、その時の笠原さんは何故かあからさまに機嫌が悪かったのだ。珍しいことだったので終了後の呑屋の席でそのことを言うと、「あんなもん、業者なんだよ」という返事だった。つまり彼は古書店の男だったのだと知って私は二度びっくりであったが、それとともに笠原さんのキャリアーを積んできたプロ作家としての別の顔も覗き見たように思ったのである。

話はずきません。笠原さん、またお会いしましょう。それまでのさようならです。

（かつまた ひろし・本学名誉教授）